

Vajravīdāraṇa-dhāraṇīについての一考察

田村 宗英

はじめに

本論で扱う Vajravīdāraṇa-dhāraṇī (金剛摧碎陀羅尼・壞相金剛陀羅尼經) は日本に伝わることはなかったが、チベット大蔵経中に多く註釈書や儀軌類⁽¹⁾が収められており、広くインドやチベットで流布したものと考えられる。その著者として、ボーデイサットヴァ (Bodhisattva (= Śāntaraksita))、パドマサンバヴァ (Padmasambhava)、ブツダグフヤ (Buddhaguhya)、ヴィマラミトラ (Vimalamitra)、スムリテイジュニャーナキールテイ (Smṛtījānakīrti) など著名な人物たちが名を連ねており非常に興味深い⁽²⁾が、未だに研究はなされていない。そのため、この陀羅尼がどのような目的で説かれたのか、またどのような効力があるのかということを解明していく必要がある。

また、本論で使用するテキストについて、skt. ed に Yutaka Iwamoto : Beiträge zur Indologie, II, S.7-9⁽³⁾があるがチベット訳、漢訳と相違する点が多く見られる。そのため、適宜 Skt. MSS⁽³⁾を参照したが、欠けていたり、見

にくい部分も少なくなかった。このような理由からチベット語訳を中心に研究を進め、また、歴史的な背景を考慮に入れて註釈のチベット語訳は *Bodhisattva (Śāntarakṣita)* と *Vimalamitra* の旧訳に絞り、本文と比較対照させて考察していくこととする。

第一章 ヴァジュラヴァイダーラナー・ダーラニー (*Vajravīdāraṇa-dhāraṇī*) 概観

一、*dhāraṇī* (陀羅尼) とは何か

dhāraṇī (陀羅尼) は、*mantra* (真言)、*vidyā* (明呪)、*mantra* や *mantra* の心髄だけを取り出した *hrdaya* (心呪) と同様の意味と機能を持つものとして扱われる。また、説かれる形式として、*dhāraṇī* (陀羅尼) はこれらのうちでは比較的長文であって通常の経典と同じく帰敬偈に始まり、序文(縁起)、そして主部には擬態語や擬音語を並べたり、祈願する内容を短い単語で並べ、その単語の末尾に息災を祈念する場合には「*svāhā*」(そわか)、敵対するものの調伏を祈念する場合には「*hūṃ phai*」(うんはった)を付ける。

次に、*dhāraṇī* (陀羅尼) を語義と歴史的変遷の中で見ていくと、*dhāraṇī* は *Skt. dhāraṇī* の音写字であり、*√dhr* から発展したことばといわれる。漢訳においては「総持」、チベット語訳では「*gzuns*」と訳され、「保持すること」を意味している。これは、ヨーガの一修法であるダーラナー *dhāraṇā* (執持⁽⁵⁾) と関連し、精神統一に役立てられた。そのため、大乘経典において、陀羅尼は三昧と並べられることが多かったようである。初期の大乘経典では、陀羅尼の意味を經典や仏教の教説を心に念じて記憶しておく、という意味で用いることが多く、教法の伝授を記憶に頼っていた時代においては非常に大切なものだったと考えられ、短い言葉の中に多くを含めて、一種

の記憶術として使われていたとされる。そして、陀羅尼は多義的であるがゆえに呪文にも使われるようになり、時代の進展とともに一定の効果をもたらす呪文のことを陀羅尼と称するようになった。

二、タントラ⁽⁶⁾文献におけるVajravidāraṇa-dhāraṇīの位置

Vajravidāraṇa-dhāraṇīは、短い七つの陀羅尼經典の集成であるサプタヴァーラ⁽⁷⁾ (Saptavāra) の第二番目を構成するものであり、『プトン仏教史』(Toh蔵外5197)の第四章「目録部」におけるタントラ文献の分類⁽⁸⁾に従うと、所作タントラ⁽⁹⁾ (Kriyāntātra) のうちの金剛手タントラ (金剛部) に属する。

三、Vajravidāraṇa-dhāraṇīの成立年代

まず註釈家の年代で見ると、古いものはBodhisattva (Śāntarakṣita) ' Buddhaguhya ' Padmasambhava である。Bodhisattvaは、Śāntarakṣita (七二五—七八三) のことであり、チベットで「親教師 Bodhisattva (mkhan po Bodhisattva)」と主に流伝⁽¹⁰⁾前期においてこのような呼び方をされる。Śāntarakṣitaは、ナーランダール寺院の学匠で七六三年にチベットに入り、ルンツツプ宮殿で十善、十二縁起など仏教の基本教義を説いたが、當時たまたま起こった災害・疫病が仏教信奉と関連付けられてネパールへ退くこととなった。しかし、七七一年頃に再び招かれてボン教徒の妨害を阻止するためPadmasambhavaをインドから呼び寄せた。Padmasambhavaは、西北インドのウディヤーナからŚāntarakṣitaに招かれて七七三年頃チベットに入り、呪術によってチベットの神鬼、精霊を調伏し仏教の護法神となすのに成功したといわれている。また、ニンマ派⁽¹¹⁾の祖と仰がれ、チベット密教を象徴する神秘的人物である。Buddhaguhyaは『大日経』、『初会金剛頂経』の註釈家として有名であり、ま

た、チベットのテイソンデツエン王（七四二—七九七）の時代にチベットに招こうとしたが、カイラーサ山に修行中で果たせなかったといわれる人物で、八〇九世紀に活躍したと目される。⁽¹²⁾

漢訳の年代で見えていくと一番古くて宋の時代であり九世紀となる。これらから判断して、遅くとも七世紀後半か八世紀前半までに成立していたものと考えられる。

第二章 Vajravīdāraṇa-dhāraṇīの内容と思想

一、本文と註釈の比較検討

(1) Vajravīdāraṇa-dhāraṇī 本文概要

この dhāraṇī（陀羅尼）は金剛手が仏の不可思議な力を受けて（加持されて）忿怒金剛手⁽¹³⁾となって説いたものとされ、「一切の有情を恐れさせる」、「停止させる」、「惑乱させる」など荒々しい内容が中心となっている。また、最後に陀羅尼の功德を偈の形で説いている。

(2) Bodhisattva-Ṭ Vimalamitraの註釈の比較検討

① Vajravīdāraṇa-dhāraṇī という名称について

まず、始めに Vajravīdāraṇa-dhāraṇī という題名を両者の解釈を通して考察していきたい。A. Bodhisattva^註、B. Vimalamitra^註と二つ対比をさせていく。

「vajra (金剛) とは、外界の有為の事物に譬えたようなものであって、(有為の実体を表すことと同様であり) 智慧自体の固有性質(自性)において他者の分別たちによって切り離されず…… Vidāraṇa (壞相・摧破) というのは、……客体と主体「という考え」を有する有情たちを教化し…… hjom pa (vidāraṇa 驅逐する・破壊する・調伏する) は有身見の考えをもつことによって、外と内の障礙を満ち溢れさせる原因となる煩惱たちを破壊するから [hjom pa 言うのである] …… gzuns (dharāṇi) というのは、掴んで捨て去らないという意味である。すなわち、何によって何を「掴んで捨て去らないのか」というと、金剛と呼ばれるものと破壊すること、という二つである。⁽¹⁵⁾」

B. Vimalamitra註

「vajra (金剛) というのは、真実の智慧(理解力) についていうのであり、常住と無常、安樂と苦しみのあるゆる性質そのものを破壊することをなすのである。そこから、daraṇa (壞相・摧破) という意味なのである。dharāṇi (陀羅尼) というのは(智慧の) 基体と智慧が無二であることをあらわしている。⁽¹⁶⁾」

以上のように両者は述べており、vajra (金剛) については、両者とも、金剛とは、ものごとの本当のあり方を認識する真実の智慧に他ならず、この金剛という真実の智慧は、誤った分別を退けるものであるとしている。また、vidāraṇa (壞相・摧破) については、金剛と関連付けられ、誤った見解やその見解をもつものを金剛という真実の智慧によって破壊する、または調伏することをvidāraṇa (壞相・摧破) としている。dharāṇi (陀羅尼)

について、Bodhisattvaは「金剛 (Vajra) と破壊する」と (vidāraṇa) を掴んで捨て去らない」としているのに対し、Vimalamitraは「智慧をもつ主体である基体と智慧がひとつである」としており、ふたつのものをひとつにまとめるといふ点では一致しているが、まとめるものが「金剛と破壊すること」、「智慧の基体と智慧」というように異なっている。

② 陀羅尼の功德

次に、本文において陀羅尼の主部が説かれた後に陀羅尼の功德が説かれているので、これを考察していくことにする。

A. Bodhisattva註

「これ (陀羅尼の功德) については二つあり①苦しみを払拭することと②安樂を生じること、である。・・・前 (の世) の数え切れない生「涯」により集積した罪悪、そして「前世と」同様に現在「の生」においてなされたもの (罪悪など) たちは浄化されることとなるし、原因である罪悪がなされたならば、罪悪の果である悪趣に存在する (生まれる) という苦しみをもたらすものを残りなく消すので、「あらゆる罪悪は浄化されて、あらゆる苦しみをもたらすものはなくなる」というのである。⁽¹⁷⁾」

B. Vimalamitra註

「あらゆる罪障は浄化されて、あらゆる苦しみをもたらすものはなくなる」というのは、この經典の内容に

入って（理解して実践する）マンドラの儀軌としての聖なる教え「を理解して実践するのと」同じである。マンドラに入るなどしたならば、煩惱という罪障と業という罪障と報いという罪障という罪悪などが浄化される、という意味である。「あらゆる苦しみをもたらしものはなくなる」というのは、このタントラを實踐して「修行を」成就するならば、煩惱の三苦・八苦（苦苦・壊苦・行苦／怨憎会苦・愛別離苦・求不得苦・五取蘊苦）などというあらゆる苦しみが解消される。⁽¹⁸⁾

陀羅尼の功德にあたる部分を指摘している箇所は両者とも一致している。

陀羅尼の功德とは何かというと、Bodhisattvaは、「苦しみを払拭することと安樂を生じること」としており、功德というものの性質が端的に述べられている。

また、本文における「あらゆる苦しみをもたらしものはなくなる」という部分における解釈について、Bodhisattvaは「罪悪の果である悪趣に存在する（生まれる）」という苦しみをもたらしもの……、「Vimalamitraは「煩惱の三苦・八苦（苦苦・壊苦・行苦／怨憎会苦・愛別離苦・求不得苦・五取蘊苦）などというあらゆる苦しみ……」とそれぞれ苦しみを「をもたらしもの」を挙げて、これらの苦しみを「をもたらしもの」がこの陀羅尼の功德によって解消されると述べている。

③念誦の回数と沐浴

次に、このVajravidāraṇa-dhāraṇīを念誦する回数が決められており、本文では、「二十一あるいは百八回」と述べられている。ここを、註釈では、

A. Bodhisattva註

「このダーラニーを回数通り念誦しながら沐浴せよ、という教えである。」⁽¹⁹⁾

B. Vimalamitra註

「王様と身分の高いもの（大臣など）においては、百八回であり、身分の低いもの（役人など）または、使用人においては二十一回唱える。「より」身分の低い使用人においては七回唱える。「王は常に沐浴せよ」というのは、力のある王は「この」心呪をなすのである、ということである。」⁽²⁰⁾

以上のように、いずれも念誦の回数と沐浴を関連付けて解釈している。また、Vimalamitra註では、この引用からすると身分の高低によって区別しているように受け取れるが、おそらく人々の能力に応じて念誦の回数を規定すべきだという考えがあったものと思われる。

二、Vajravīdāraṇaという尊格に関して

効果が大きいと人々に認められた陀羅尼は尊格化されていったが、このVajravīdāraṇaも例外ではない。Vajravīdāraṇaという尊格は金剛手の一種といわれ、ラダツク（西北インド）で比較的数多く作例が見られる⁽²¹⁾。尊容は白色、青色、青緑色、緑色などで金剛薩埵とよく似た姿勢をとるが、右手に羯磨（visvakarma）、左手に金剛鈴（ghanta）を持っている。金剛手と同じく柔和形と忿怒形の二種があるが忿怒形も忿怒金剛手とよく似ている。アルチ・ゴンパ新堂やサスポール・ゴンパ諸尊堂などに壁画がみられるようである。

THE INDIAN BUDDHIST ICONOGRAPHY では、「アムリターンダ (Amṛtānda) のダルマコーシャサンダラハ (Dharmakośasamgraha)⁽²²⁾ では、色がしめされていないが、五つの顔と十本の手をもち、右手には I 与える仕草 II 金剛杵 III 矢 IV 剣 V 鉤を持ち、左手には、I 守護する仕草 II 旗 III 弓 IV 楯 V 繩を持っている」と述べている。また、「Two Lamaistic Pantheons では、これと一致せず一面二臂で右手に羯磨金剛杵、左手に金剛鈴を持ち結跏趺坐している。

śata-pitaka268におけるVajravīdāraṇaの挿絵を見ると、三面六臂であるが、印刷が鮮明でないため手に何を持っているのか定かではない。

また、『玉重コレクション』の中にある、金剛摧破曼荼羅 (Vajravīdāraṇa Maṇḍala) を見ると、体の色は緑色で、右手に羯磨金剛杵、左手に金剛鈴を持ち、一面二臂であり、その曼荼羅には、二十三尊や十五尊、十九尊、九十七尊など様々な形式があるようだが、この作品は金剛摧破 (Vajravīdāraṇa) の周りに十忿怒⁽²³⁾を置き、外周部には六十四人の使者を描いている。

三、歴史的背景の考察

次に、Vajravīdāraṇa-dhāraṇīが説かれた歴史的背景を考察していくこととする。

これまで、BodhisattvaとVimalamitraの註釈を概略的に見てきたが、インドとチベットの仏教を歴史的な流れの中で考える場合、このBodhisattvaは外せない。先にも述べたがBodhisattvaはŚāntaraksitaの弟子であり、インドからチベットに入って、Padmasambhavaと共にチベット密教の基礎を作ったことはあまりに有名である。Śāntaraksitaがチベットに来るまでの出来事を大まかに見ていくと、チベットに仏教が伝来した時期について

は、様々な伝説が混在しており確定できないが、六世紀末から七世紀初頭にかけてチベット高原は群雄割拠しており、これらを統合してチベット王国を築いたのが、ソンツェンガンポ王（五八一—六四九）といわれる。この王の時代に唐朝から文成公主が降嫁（六四一年）したことをきっかけに仏教が伝えられ、ラモチェ寺が建立された。また、チデツクツェン王の時代には、除災・護国を説く『金光明経』が将来され、人々が求める現世的な功德と相俟って、厚く信奉された²⁴。続いて、テイソンデツェン王の時代はチベット王国の絶頂期であり、王は仏教を積極的に導入するために使いを派遣し、当時、インドのナーランダール寺の学僧として名高かったŚāntarakṣitaをチベットへ迎え入れた。その後ŚāntarakṣitaがPadmasambhavaを招いたことなどは、前に述べたので省略するが、その後、七七五年から十二年がかりで王命によるサムイェー大僧院の建立が始まり、ŚāntarakṣitaとPadmasambhavaがこれを主導した。大本堂が完成した七七九年には、インドから説一切有部の戒律に従う十二名の僧が招かれ、チベット人六人（「試みの六人」）が出家し、ここに初めてチベットの僧団が成立したのである。ここで、Padmasambhavaについてであるが、このPadmasambhavaのVajravīdāraṇa-dhāraṇīの註釈を残している。本研究では、詳しくみることができなかつたが、概ねŚāntarakṣitaの解釈に似通っており、マンダラや陀羅尼の主部に関して、多くの尊格を登場させて詳細に解説している。また、チベット密教の宗派には、ニンマ派・カギユ派・カーダム派・サキヤ派・ゲルツク派があるが、Padmasambhavaは、流伝前期の密教諸流儀と中国禅の影響を受けているニンマ派の祖として仰がれているが、Vimalamitraにおいては、ニンマ派の教法を確立する上で、中核を担っている。

以上のようなことから、Vajravīdāraṇa-dhāraṇīはニンマ派、そしてニンマ派に繋がる人々と深く結びついていると考えられる。また、ニンマ派の教説の中でも、とくにインド発祥と確実視される教説を伝えた人物たちが関

わっているのである。

四、まとめ

ここまで、いくつかの項目を立てて Vajravidāraṇa-dhāraṇī を概略的にみてきた。Bodhisattva-Vimalamitra の註釈を通して、Vajravidāraṇa-dhāraṇī に述べられていることは自体は非常に荒々しく恐ろしいものであるが、陀羅尼が何を対象にしたものを正確に把握するならば、我々に限りない福德を授けてくれるものであり、人々を脅かしたりするものではないということが理解できる。また、両者の解釈の中で大きく異なる点は見当たらず、年代としては、Bodhisattvaの方が古いことから考えると、このBodhisattvaの解釈を核にして後の註釈家たちは持論を展開していったのではないかと考えられる。

PadmasambhavaやVimalamitraなどニンマ派に繋がる人物が註釈を書いていることから、この陀羅尼がチベット密教の初伝に深く関わりと目され、また、Padmasambhavaがチベットに入り土着の神々を鎮める際にこのような陀羅尼が効力をもったのではないかと考えられる。

以上のようなことから、Vajravidāraṇa-dhāraṇīはチベット密教の初伝、そしてそれに関わる最末期のインドでの密教を歴史的に解明する上でも非常に重要であるという見解に辿り着くことができるのである。

付篇 Vajravīdāraṇa-dhāraṇī 本文の試訳と訳注

一 Vajravīdāraṇa-dhāraṇī 本文

序

Vajravīdāraṇa-dhāraṇī にあたる Tib. はデルゲ版 (Toh750/949) 、北京版 (Ota406/574) 合わせて四本あり、定本は Toh 750 とした。また、註には異読を載せている。

Vajravīdāraṇa-dhāraṇī

全ての仏・菩薩に帰命致します。このように私は聞いた。ある時、世尊(仏)は金剛に住しておられた。仏の威力によって金剛手は、体全体を金剛として加持されてから、金剛の三昧に入定した。それから金剛手は仏の威力と仏の加持と、一切の菩薩の加持によって、金剛忿怒から生じた、金剛の心呪 (hrīdaya) を詳しく (rab tu) 説いた。

取り除かれることなく、⁽²⁸⁾ 切り離されない、破壊されない、真実である、堅固である、揺るぎない、あらゆることに関して無碍である、あらゆることに関して征服されることがない、一切の有情を恐れさせる、一切の有情を追い払う、⁽²⁹⁾ あらゆる vidyā を破壊する、あらゆる vidyā を抑圧する、あらゆる事業を破壊する、他「者」のあらゆる事業を破壊する、あらゆる魔物 (graha/gdon) を破壊する、あらゆる魔物から解放する、あらゆる幽鬼 (bhūta) をひとつに引き集める、vidyā のあらゆる事業の動力因、成就していないものたちを成就させる、成就しているものたちを墮落させない、あらゆる欲求を「完全に」与えるもの、一切の有情を見守る、しずめる(息

災)、発展させる(増益)、一切の有情を停止させる、一切の有情を惑乱させる「という」このマントラの偉大な力を仏の威力によって金剛手は、まさしく説いた。

Namo ratnatrayāya 三宝に帰命致します

namaś caṇḍavajrapāṇaye mahāyaksasenāpataye 偉大なヤクシヤの將軍である忿怒金剛手に帰命致します

tad yathā 例え

「om trāṭa2」(割れる、屈しろ)、「trotaya2」(引き裂け)、「sphuṭa2」(破裂しろ、燃えろ、壊れろ)、「sphoṭaya2」

(破裂せせろ、ばらばらにしろ)、「ghūrṇa2」(動け)、「ghūrṇapaya2」(動かせ)、「sarvasatvāni」

「bodhaya2」(目覚めろ)、「sambodhaya2」(完全に目覚めせせろ)、「bhrāma2」(動き回れ)、「saṃbhrāma2」

(完全に動き回れ)、「sarvabhūtāni」 「kuṭa2」(押し曲げろ)、「saṃkuṭaya2」(完全にばらばらにしろ、)「われせ

せろ)、「sarvasātrūn」 「ghaṭa2」(場を占めろ、傷つけろ)、「saṃghaṭaya2」(打て)、「sarva vidyā vajra2」

「sphoṭaya vajra2」(破壊しろ、ばらばらにしろ、せせろ)、「kaṭa vajra2」(ばらばらに分たせろ)、「maṭa vajra2」

(mṛta→死んだ、衰えた)、「matha vajra2」 「aṭṭhāsānilaya vajra」 「suvajra2svāhā」 「he phulluniru phullu」

(√phal 引き裂く、広がる) 「nigrihna kullu」(ひかんで集める)、「mili cullu kulu kuru」 「vajra vijayāya svāhā」

「kilikilāya」 「kaṭa2」(√kat 覆す、ばらばらにしろ) 「maṭa2」 「raṭa2」 「mojana pramoṭaṇāya svāhā」(√muj

じわれろ) 「calanicala」(√cal 動け) 「hara2」(√hr 持つ、運ぶ) 「sara2māraya」(√sr 走れ、√mr caus 殺せ

ろ) 「vajravīdārāya svāhā」 「cchinda2」(√cind 断ち切れ) 「bhinda2」(ばらばらにしろ、破壊しろ) 「

「mahā kilikilāya svāhā」(kirikilāya: 喜びの表現) 「bandha2」(縛り付たせろ) 「krodha2」(怒れ) 「kilikilāya

svāhā」 「curu2」(√cur 盗め) 「caṇḍala」(チャンドラーの) 「kilikilāya svāhā」 「trāsaya2」(√tras

第19号
caus⁽³²⁾kirikīlaya svāhā] 'hara2vajra dhāraya svāhā] (hara 毀ぐ' dhāraya : √dhr caus 毀
ぢぢる・止ぢるぢる)' [prahara2] 'vajra prabhañjanāya svāhā] 'mathisthira vajra] 'shutisthira vajra]

現代密教
[pratisthira vajra] 'mahā vajra] 'apratihata vajra] (aprativhan p.p 妨びるぢる)' [amogha vajra]'
[ehy vajra] [śiḅhram vajrāya svāhā] [dharaz] 'dhiriz] (√dhi りぢる)' [dhuru2] (√dhr りぢる)' [sarva
vajra kulam āvartaya svāhā] (āvri caus 覆る/√bhr る)' [amukammarayaphata] 'namah samaṅtavajrāṅam]

[sarva balaṅ āvartaya] 'mahā bale] [kaṅavetatare] 'acale] [maṅḅala māye] 'ativajra] 'mahā bale
vegarāṅa] 'tititipingale] 'daha2] 'tejovati] 'tiri2] 'bhandha2] 'mahābale] 'vajra aṅkuśajvalaya
svāhā] 'namo ratnatrayāya] 'namah caṅḅavajrapāṅye] 'mahāyaksāsena pataye] 'tad yathā] 'om
hara2vajra] 'matha2vajra] (√math 破壊しる)' [dhuna2vajra] (√dhvan まわね' 振り回す)' [daha2vajra]
[paca2vajra] (√pac 焼ける' 調理しる)' [dara2vajra] (√dr 破壊しる)' [dāraya2vajra] (√dr caus 破壊する)'
[dhruṅa2vajra] (√dhr 固定する)' [cchinda2 vajra] 'bhinda2vajra hūṅ phat] (√bhid ぶらぶらに破壊しる)'
[namaś caṅḅavajrakrodhaya] 'huru2] (√hri りかめ' 征服しる)' [tiṅha2] (√sthā 立つ' しっかり固定しる)'
[bandha2] 'hana2vajra] (√han 殺せ' 破壊しる)' [amṛte hūṅ phat]

あらゆる罪障は浄化されて、あらゆる苦しきをもたらしものはなくなる。全ての經典の根本であり、あらゆる
功德によって立派に飾られたものである。有情は老衰し(能力が衰え)、寿命を使い尽くし(寿命が尽き)、そし
て寿命を縮め、執着は円満することなく、諸尊に無関心であり、好ましい人々を憎み、農夫などを傷つけ、互い
に一致することがなく、財産の消失に伴う障礙と、憂いの苦しきから生じる痛手と、恐れと困窮と、災難と星宿、

悪霊 (kākhorda) と、恐ろしい魔物による病氣と、憂いの苦しみから生じる悪夢を見たとしても、これによつて沐浴した「ならば」、「苦しみや苦しみをもたらすものは」きれいに浄化されるのである。⁽⁷⁵⁾「この」素晴らしい經典が聞かれるべきである。良い心(思考)である心と身体と清浄な衣服によつてきれいに着飾るものは誰でも、尋深なる仏の対象領域「において」この經典を聞くとき、この經典の威力によつて、あらゆる有情の恐ろしい病氣たちであつても、それら全てが治まることを目の当たりにし、寿命と福德が増大し、全ての罪惡から完全に離れることができる。⁽⁷⁶⁾ マニ宝と芥子の種子⁽⁷⁷⁾とdurva草と白檀をともなう傷のない宝石、水晶と金剛花と、水晶と金剛花と、金もしくはは銀の瓶たちをも清浄な布で包んで水で満たし、二十一あるいは百八回繰り返し数え上げて、⁽⁷⁸⁾「この」 vajravīdāraṇa [dhāraṇī] を唱えてから、常に王は沐浴せよ。

凡例

(1) 梵文原典・チベット語訳からの引用は、和訳文のみを本文中に掲げる。また、理解の便を図るために、本文および註で示す訳文に「」で括って語句を補い、言い換えや漢訳の慣用語、還元サンスクリット語は()で括って示す。

(2) 和訳文を引用し、中略する場合は、…で示す。

(3) チベット語訳はデルゲ版を底本とし、それに北京版を対校している。

文献表

(1)略号

Ch.: 漢訳

D.: デルゲ版チベット大蔵経

ed.: edition, edited.

IASWR: *Buddhist Sanskrit Manuscripts, A Title List of the Microfilm Collection of The Institute for Advanced Studies of world Religions*, New York, 1975.

MSS.: 梵文写本

Ota.: 『影印北京版西藏大蔵経—大谷大学図書館蔵—總目錄 附索引』(The Tibetan Tripitaka Peking Edition — kept in the Library of the Otani University, Kyoto —, Catalogue & Index, Daisetu T.Suzuki) 西藏大蔵経研究会、昭36

P.: 北京版チベット大蔵経

śata-pitaka: Lokesh Chandra (ed): *Śata-pitaka series Indo-Asian Literatures*, New Delhi, 1981

Skt.: Sanskrit.

Tib.: チベット語訳

Toh.: 『西藏大蔵経總目錄東北大学蔵版』(A complete Catalogue of the Tibetan Buddhist Canons (*Bkash-hgyur and Bstan-hgyur*), ed.by H.Ui, M.Suzuki, Y.kanakura, T.Tada, H.Hadano) 東北大学・印度学研究会、

大正…『大正新脩大藏經』

(2) 使用テキスト類

〈Vajravīdāraṇa-dhāraṇī本文〉

skted : Yutaka Iwamoto : Beiträge zur Indologie, II, S.7-9.
(2)

Tib : Toh 750=949, Ota 406=574

Badsra bi dā ra ṅā nā ma dhā ra ni/

rDo rje rnam par ḥjoms pa ses bya baḥi gzus/

Ch : (a) 大正1416

金剛摧碎陀羅尼 (一卷) 宋 慈賢 訳

(b) 大正1417

壞相金剛陀羅尼經 (一卷) 元 沙囉巴 訳

〈注釈書〉

Bodhisattva

Tib : Toh2678, Ota3502, 中華大藏經36卷No.1585 (p.431-p.446)

Rdo-rje rnam-par-ḥjoms-pa shes-bya-baḥi gzuns-kyi bśad-pa

Vajravīdāraṇā-nāma-dhāraṇīkā

Vimalamitra

Tib : Toh 2681, Ota3505, 中華大藏經36卷No.1588 (p.520-p.540)

Rdo-rje rnam-par-hjoms-pa shes-bya-bahi gzuns-kyi bśad-pa

Vajravīdāraṇā-nāma-dhāraṇīkā

(3) 参考文献

BENOYTOSH BHATTACHARYA : *THE INDIAN BUDDHIST ICONOGRAPHY* (FIRMA

K.L.MUKHOPARADHYAY, CALCUTTA 1958)

Marie-Thérèse DE MALLMANN : *INTRODUCTION A L'ICONOGRAPHIE DU TÂNTRISME*

BOUDDHIQUE (Librairie d'Amérique et d'Orient, Pris 1986)

W.E. CLARK : *Two Lamaistic Pantheons* (HARVARD UNIVERSITY PRESS, CAMBRIDGE, 1937)

色川大吉編 : 『チベット・曼荼羅の世界』 (小学館、1995)

インド・チベット研究会 : 『チベット密教の研究』 (永田文昌堂、1982)

氏家覚勝 : 『陀羅尼思想の研究』 (東方出版、1987)

田中公明 : 『曼荼羅イコノロジー』 (平河出版社、1987)

田中公明 : 『チベット密教』 (春秋社、1993)

田中公明編・『玉重コレクション タンカの精華』（渡辺出版、2004）

塚本啓祥・松長有慶・磯田熙文編・『梵語仏典の研究Ⅳ、密教経典編』（平楽寺書店、1990）

東北大学文学部東洋・日本美術史研究室・『河口慧海请来チベット資料図録』（東北大学文学部、1986）

奈良康明・『真実語について—仏教呪術の一側面—』（『日佛年報』38号、1972）

西岡祖秀・『『プトゥン仏教史』目録部索引Ⅲ』（『東京大学文学部文化交流研究施設研究紀要』6、1983）

羽田野伯猷・『チベット・インド学集成』第一～四卷（法蔵館、1986・1987）

松長有慶・『密教経典成立史論』（法蔵館、1998）

松長有慶編・『密教大系 第一卷 インド・チベット密教』（法蔵館、1994）

註

(1) 註釈：Toh 2678-2687, Ota 3502-3511. 儀軌類：Toh 2907-

2942, Ota 3733-3767.

(2) Vajravidāraṇa-dhāraṇīについて触れた論文としては、羽田

野伯猷『チベット・インド学集成』インド篇Ⅱ「ジュニャーナ・シュリー・バドラ著『聖入楞伽経註』おぼえがき」

(p.104-105) のみである。

(3) 「入手したものは、IASWR MBB-II-249, sata-piṭaka 268

(2MSS) の二つである。

(4) 大抵は、命令の形や呼びかけの形で表現される。

(5) 心を一点に結びつけて持続すること

(6) 本来、後期密教経典のことを指していたが、チベットでは

密教経典をすべてタントラと呼ぶ。

(7) saptavāra [1. Vasudhāraṇāmasīottaraśataka (ヴァスター

ラー) に対する讃頌] 2. Vajravidāraṇa-dhāraṇī 3. Gaṇpatihṛdaya (ガナパティに帰命して一切の成就と安穩、

記憶力の増進等の功德を得ようとしたもの) 4.

Uṣṇīsavijayādharāṇī (いわゆる『仏頂尊勝陀羅尼』の) 5.

と：悪趣や生死の苦しみを滅し長寿安穩の功德を得ようとしたもの) 5. Parṇasābarīdhāraṇī (パルナシャバリーに帰

命して病氣平癒の功德を得ようとしたもの) 6.

Māricīdhāraṇī (日・月に先行し捕まえることも縛する) 7.

- ともできない風神に帰命し、これと同様の威力を得ようとしたもの) 7. *Grahamātrikādhāraṇī* (九曜 *Navā-Graha* などの害から有情をまもる手段として金剛手が世尊に尋ねる形式をとる。九曜にも供養を行えば所願円満・福徳長寿を得られると説き、その成就のための陀羅尼などが載っている)]
- また、これらの配列やまとめ方はネパールで創始されたものといわれる。
- (8) 西岡祖秀・『プトゥン仏教史』目録部索引Ⅲ、『東京大学文学部文化交流研究施設研究紀要』6、1983)
- (9) 諸尊の礼拝法、供養法など、真言・讚・陀羅尼などの行者が行う外面的作法を説くタントラ
- (10) チベット仏教史を流伝前期と流伝後期に分けるのはプトンの方式であって、ランダルマ王の破仏(八四一年)で流伝前期が終わり、大翻訳官リンチェンサンポの翻訳以後を流伝後期という。また、リンチェンサンポは、イエーシェーウー王にインドから正しい仏教を導入するために留学生としてカシミールに派遣され、チベットに帰ってきた後、精力的に翻訳をこなし、仏教復興に大きく貢献した。
- (11) 詳しくは後にも述べるが、*Padmasambhava* によってもたらされた密教はチベットの土着信仰と結合しニンマ派を形成するに至った。
- (12) このときの *Buddhaghosya* の王に対する返書は後世の偽作の疑いが濃い。(羽田野伯猷「チベットの仏教受容の条件と変容の原理の一側面」、『チベット・インド学集成』第二巻 チベット篇Ⅱ, p.31)
- (13) 忿怒形の金剛手のこと。忿怒の形相は強い威力を表現したものである。
- (14) 五取蘊に対してこれを我であり我の所有であると考える実体的見解
- (15) 中華大藏経36卷(以降同じなので省略する) p.432, 1.10-p.433, 1.3
- (16) p.520, 1.16-1.19
- (17) p.440, 1.18-p.441, 1.12
- (18) p.532, 1.16-p.533, 1.3
- (19) p.443, 1.21
- (20) p.537, 1.10-1.12
- (21) 『チベット密教の研究』p.143
- (22) 十九世紀ネパールの仏教綱要書
- (23) 十忿怒 [*Yamāntaka* (大威徳), *Prajñāntaka* or *Aparājita* (無能勝), *hayāgrīva* (馬頭), *amṛtakundali* (軍荼利), *Acara* (不動), *Takkirāja*, *Niradānda*, *mahābala*, *Uṣṇisacakra* *vartin*, *Sumbharāja*]
- 忿怒尊は明王のことであるが、チベットでは明王の概念がないので忿怒尊と呼ぶ。
- (24) 流伝前期のチベット仏教を王室仏教と規定し、その中での「金光明経」の役割を指摘した論文に羽田野伯猷「チベットの仏教受容の条件と変容の原理の一側面」(羽田野伯猷

- 『チベット・インド学集成』第二巻 チベット篇Ⅱ) がある。
- (25) Toh949 の *thams cad* が入っている
- (26) Toh949 の *thams cad* が入っている
- (27) Toh750 以外は、註釈も含め全て *kyi* (属格) であるので、それに従った。
- (28) Toh750, Ota406 では *mi thub pa* (取り除かれることのない、破壊されない) が入っている。しかし、*Vimalamitra*, *śāntaraksita* の註には入っていない。
- (29) Toh750, 949 Ota574 は *hjiil ba*. (追い払う、追い出す、取り除く), Ota406 *hjiig ba* (破壊する) となっており、どちらもでも意味がとれると思われる。ここでは、定本になっている Toh750 に従っている。
- (30) *Vimalamitra* 註 *namas caṇḍavajrapāṇaye mahāyaksasenapataye*
- (31) Toh750/949 *truia*, Ota406/574/*Vimalamitra*, *traia* (割れる、屈する) → 意味を取れるのは Ota の *tr*、*tr* を採用
- (32) *Vimalamitra* 註 *ghūrṇa2*
- (33) *Vimalamitra* 註 *ghurṇapaya2*
- (34) Ota406/574/*Vimalamitra* 註 *bodha 2*
- (35) *Vimalamitra* 註 *sambhrama2*
- (36) Ota406/574 *sarvabhūṭani*
- (37) *Vimalamitra* 註 *sarvasātrūṃ nāṃ*
- (38) Toh949 の *saṅghāyaya2*
- (39) Ota574 の *mātha vajra2*
- (40) *rr* は混乱が大きく、Toh750/949 *aitahāsanīla vajra suvajra svāhā*, Ota406/574 *aitahāsa vajra2 nīlavajra suvajra vajraya svāhā*, *Vimalamitra* 註 *aitahāsanīlaya vajra suvajra2 svāhā*
- (41) Ota406/574 *he phuluniru phullu*
- (42) Toh750/949 *nigrhna kullu*, Ota406/574/*Vimalamitra* 註 *grhna kullu*
- (43) Ota406 では欠けている。
- (44) *Vimalamitra* 註 *vajra vijaya svāhā*
- (45) Ota406/574 *kilikilāya*, *Vimalamitra* 註 *kilikilāya svāhā*
- (46) *Vimalamitra* 註 *moṭa2 pramoṭaṇaya svāhā*
- (47) *Vimalamitra* 註 *vajra vidāraṇaya svāhā*
- (48) *Vimalamitra* 註 *cchanda* (√*cand* 𑖅𑖅𑖅𑖅𑖅𑖅)
- (49) Ota406/574 *kilikilāya*
- (50) Toh750, *Vimalamitra* 註 *kilikilāya svāhā*, Toh949/*Ota406/574 vajra kilikilāya svāhā*
- (51) Toh750 *caṇḍala*, Toh949 *caṇḍa*, Ota406/574/*Vimalamitra* 註 *caṇḍali*
- (52) Ota406/574 *kilikilāya*
- (53) Ota574 *vajri*
- (54) Ota574 *matisthira*
- (55) Toh750/949 *shutisthira*, Ota406/574/*Vimalamitra* 註

